慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	袁英明著『京劇名優・梅蘭芳と日本』
Sub Title	Yuan, Yingming, Mei Lanfang's Beijing opera performance tour in Japan : 1919, 1924
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2022
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.95, No.6 (2022. 6) ,p.103- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20220628-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

『京劇名優・梅蘭芳と日本』

袁英明　著

一

日本で中国人の人名を仮名で表記したり、呼んだりする場合、日本式が普通である。毛沢東（もう・たくとう）、周恩来（しゅう・おんらい）、蔣介石（しょう・かいせき）、習近平（しゅう・きんぺい）……となる。たったひとりの例外があった。梅蘭芳（メイ・ランファン）である。日本の歌舞伎に匹敵する中国の伝統演劇京劇の名優として知られる梅蘭芳が大正時代二度に渡って訪日公演を行い、当時の日本人の心を深く捉え「梅蘭芳ブーム」、「京劇ブーム」という社会現象を起こしたからである。日本公演の成功によって自信を得た梅蘭芳はアメリカやソ連での公演を行い、国際的名優との評価を得るにいたる。それは民間レベルの国際交流のパイオニアとしての意味もあった。

梅蘭芳が日本で公演したのは、戦前の一九一九年、一九二四年、戦後の一九五六年の三回であるが、三回目は冷戦下、日中間に国交のない時代に周恩来の意図を介して政府の方針に基づいておこなわれたもので、本書の対象は純粋の民間交流であった戦前の二回に絞った。梅蘭芳訪日公演を巡る歴史的、文化的、演劇的背景や日中関係、両国関係者の役割を検討し、訪日公演を実現した経過とその目的を史料によって調べ、さらに公演が何故成功したかを分析しようと試みたのが本書である。

こうした観点から著者は本書を次のように構成する。

序　章　梅蘭芳に関する研究
第一章　訪日公演の背景
一　歴史的・文化的背景
二　演劇的背景
第二章　訪日公演の経過
一　計画過程と訪日目的
二　最初の海外公演先に日本を選んだ理由
三　二度の訪日公演の実施
第三章　訪日公演の反響
一　初回訪日公演の評価
二　二回目の訪日公演の評価

三　「品梅記」に見る日本人学者の反響と動向
第四章　訪日公演の成功要因
一　外的な要員―後援者、日本経済とメディア
二　内的な要因―梅蘭芳の芸術的造詣
三　美学的な要因―中国古典演劇の源流と美意識
終　章　梅蘭芳の訪日公演とは

二

序章では、これまでの梅蘭芳に関連する主な先行研究と文献についての紹介がなされる。中国では長い間演劇学の観点、いわゆる「梅学」の領域で梅蘭芳研究の成果が蓄積されてきた。役者としての成長過程、芸術的造詣の深化、審美の特徴、関連する文化事項など幅広い領域にわたっている。まず中国語の書籍と論文が紹介されるが、歴史的、資料的限界の壁の高さから国際交流、特に日中間の演劇文化交流に関して系統的に掘り下げた研究は極めて少ない。ここ数年、中国の若手研究者による業績が生まれつつあるが、依然として質的にも、量的にもさらに研究の積み重ねが必要な段階である。日本における研究動向は梅蘭芳の戦前二回の訪日を取り上げた論文二編、戦後の歌舞伎と京劇の文化交流の足跡を通して日中友好の在り方を考察した論文一編があり、本書の研究の手掛かりとなったという。

第一章　訪日公演の背景では、一九一九年におこなわれた梅蘭芳の日本初公演実現には日中両国間の歴史的、文化的、さらに演劇界の動きがあったことが紹介される。歴史的・文化的背景として、アヘン戦争以後、清朝は外国に学ぶ必要を認め、さらに日清戦争の敗北は日本への目を開かせ、留学気運が盛り上がった。辛亥革命以後、民主共和の思想が徐々に浸透し、こうした情勢のもとに「新文化運動」が生まれる。一九一九年、北京の学生が起こした「五四運動」は新文化運動と相まって演劇の世界にも大きな影響を及ぼした。伝統演劇を考察し、その社会的影響を考慮し、芸術の完成度を高め、新たな創作をしたいという梅蘭芳の思いと重なるものであった。梅蘭芳は声、舞台姿など天賦の才能に恵まれ、人柄も温厚で新旧を問わず文化人から支持され、京劇を世界へ紹介するには最適の人物であった。

第二章　訪日公演の経過　一九一三年、新文化の流れのなかでおこなわれた上海での公演の大成功により、梅蘭芳は海外で演技を披露したいとの思いを抱く。日本公演を実現させた三人のキーパーソンは大倉財閥の創始者であり帝

国劇場会長であった大倉喜八郎、日本文学者で庭園学研究家の龍居松之助、中国銀行総裁馮耿光であった。北京に長期滞在中「梅ファン」となった龍居、訪中した際梅蘭芳の舞台をみて帝劇での上演を決意した大倉、そして梅蘭芳の友人であり、中国側で動いてくれた馮耿光、この三人のうち一人が欠けても梅の訪日は実現しなかったのである。日本公演の演目と公演の形式はどうするか。外国人に「国劇」としての京劇を紹介する初めての試みであり、舞踊をより強調し、衣装や容姿で「美」を強調するようにし「天女散花」などに決まった。第一回日本公演は五月一日に帝劇で幕を開け、十二日に幕を閉じたが、好評により当初の予定より二日間延長されたほどであった。

しかし、公演は中国内の政治状況に影響される。当時中国国内では日本が第一次世界大戦中袁世凱政権に突き付けた「二十一カ条要求」を受諾した五月七日を「国恥記念日」として、反帝反日の「五四運動」が激化していた。東京でも約二〇〇〇人の中国人留学生が「国恥記念日」のデモを敢行し、梅蘭芳の日本公演を「旧封建社会」の表れとし、留学生の一部は梅を「親日派」と指弾し、脅迫文を送りつけて公演中止を迫る者もいたほどであった。情勢が緊迫化するなか、公演の責任者は「芸術に国境なし」の信念のもと公演の継続を決めたのであった。

公演の成功に大きな役割を果たしたのは大倉喜八郎であった。大倉はメディアの活用、後援会の設立など文化芸術に対する熱意を持ち、日中演劇文化交流の端緒を開き、大きな功績を残した。

梅蘭芳自身にとって第一回訪日公演の目的は次の四つであったとの指摘がなされる。

一　中国の伝統演劇を海外に紹介すること
二　海外の観客から中国伝統演劇に対する感想を聞くこと
三　日本の演劇を研究すること
四　妻の日本観光の宿願を実現すること

残念ながら、一九一九年の訪日公演の中国側の記録は公開されないまま文化大革命のなかで失われてしまったという。

第一回公演から五年後の一九二四年十月から十一月にかけて梅蘭芳は二回目の日本公演をおこなう。今回の公演は大倉喜八郎の米寿の祝いに加え、関東大震災後に改築された帝国劇場のこけら落とし公演に出演する、日本の演劇や

文芸について学び、将来は舞踏を主に女性問題を反映した演目の創作に取り組みたい、震災後の東京の状況を見たいという目的をもっての来日であった。その前年に発生した関東大震災は甚大な被害をもたらしたが、梅蘭芳は北京の京劇関係者に呼びかけ日本の演劇界への義援金拠出を呼びかけ、チャリティ公演を行い、その収益を日本に贈るなど積極的に動いた。訪日の間、梅は日本の歌舞伎にとどまらず、能楽、新派劇などを鑑賞し、形式や内容面で日本の舞台を参考にし、新たな方向性を模索する。これこそ彼が日本を訪れた真の目的の一つであったとの指摘がなされる。

では最初の海外公演先に日本を選んだ理由はなんであったのか。実はアメリカは日本よりはるかに高額な条件を提示し、フランスも自国の芸術界の名誉にかけて資金を惜しまず梅蘭芳の招聘に動いていた。なぜ、好条件の米仏より日本を優先したのか。梅自身がそれに言及したものはないが、著者は内的要因を指摘する。それは広く豊かな人的つながりであった。大倉喜八郎をはじめとするかねてから梅蘭芳の芸を評価し、個人的にも信頼関係のあった日本人の存在、日本への留学経験を持つ中国の友人の後押しがあり、外的要因として、日本への文化的親近感、経済的保証、新聞、雑誌など活動を報道してくれるメディアの役割、日本の演劇の鑑賞があげられるという。

第二章の後半は二度の訪日公演の実施についての記述へと進む。日本公演の全体の過程は、公演の全日程、参加人数、時には梅蘭芳の京劇と日本の演目とのオムニバス形式での公演、チケットの価格、日本の芸術界の人々との交流であった。特に興味深いのは、高額な入場料と帝劇の経営戦略である。尾上梅幸、松本幸四郎に市村羽左衛門が加わった歌舞伎の本興行でも帝劇特等席四円七十銭であったのに対し、梅蘭芳の公演は特等十円、一等七円、二等五円、三等二円、庶民が五十銭で楽しめる四等でも倍の一円と極めて高い入場料を設定したことであった。小学校の教員の初任給が十二円～五十円、東京帝大の年間授業料が五十円であった時代における破格な高額な入場料は「高いからこそ価値がある」との心理を生み、観衆が押し寄せ、最高価のチケットはたちまち完売したという。

第三章は訪日公演の反響についての記述である。

初回公演の代表的評価や見解について当時の報道から日本の社会や観客がいかに梅蘭芳を受け止めたかの考察がなされる。初公演は東京、大阪、神戸の三都市でおこなわれた。政治的に両国は緊張状態にあったが、三都市の新聞は期せずして「日支親善」、「日支友好」、「芸術に国境無し」

の視点から、日中文化交流に明るい希望を示した。

東京公演の「天女散花」には各紙に多くの記事と論評が掲載された。「東京日日新聞」は梅蘭芳の初舞台の舞と歌唱を称え、観客が惹きつけられる光景を大きく紙面を割いて伝えた。二日間の大阪公演の模様を各新聞はこぞって報道し「あらゆる階級の男女がその演技に魅了された」と激賞した。神戸の公演は華僑の招待と主催によって実現したものであり、主に神戸中華学校への寄付金募集を目的としたもので、観客も大半が日本で生活する「在留中国人」であった。募金公演は「日支親善」の呼びかけのもとに、賛同者には両国の有名人、文化人、各界の賓客が名を連ね、チケットは一日でほぼ完売、その利益はすべて中華学校に寄付され、当初の目的は達成された。

主な演目は「天女散花」と「御碑亭」であった。「天女散花」は仏教劇で、天女が病気の弟子のそばに花を撒くという設定で、梅蘭芳は天女を演じたが、歌の情緒だけでなく、しなやかで美しく、リズムが明快な舞も強調しなければならない。同時に天女の優雅で颯爽とした雰囲気も表現しなければならず、難度が高く芸術性の豊かな演目である。「御碑亭」は都の試験を受ける書生とその妻をめぐる愛憎の物語であり、いうまでもなく梅は若妻を演じる。さらに「花衫」と梅の「美」の魅力―「容姿美」にとどまらず、内面の「気質美」、「細部の美」、「リズム美」、つまり東洋文化と東洋芸術の「含蓄美」に日本の観客が感嘆したことが紹介される。梅蘭芳は演劇を改革して「唱」と「しぐさ」、「たちまわり」が重視される「花衫」という役柄を発展させたが、その点の指摘も見られる。

梅蘭芳の芸をめぐり芸術上の批判や提案、さらに論争もみられた。しかし、それはほとんどが善意に基づくものであり、建設的な意見であった。専門家は舞台のセット、装置、音楽、歌唱、演劇性などの面での不足や改善すべき点をあげた。例えば、雲の動きを表現するために歌舞伎の波のセットを「天女散花」に代用しているが、それは組み合わせが不適当でまったく釣り合わないし、帝劇の広い舞台の上に京劇の舞台を作ればよかったといった指摘である。こうした指摘は、二回目の公演に生かされ、実践された。

著者は以上の状況から、梅蘭芳の訪日初公演に関する日本の新聞、雑誌を中心とする評論の内容を分析すると次の六点に集約できるという。

一　今回の公演は政治行為ではなく商業ベースによる芸術交流であった

二　メディアは賛美一辺倒であった
三　梅蘭芳の「美」に陶酔した観客の声を反映するものであった
四　梅蘭芳の演技に集中した
五　部分から全体をとらえ注目する視点に特徴がみられた
六　中国の伝統文化と民族芸術の特色を強調した

さらに、第三章の記述は第二回訪日公演の評価へと進む。第二回公演は、初公演から五年後の一九二四年であった。当時の中国は軍閥による抗争が激化していたが、日中関係に大きな影響を及ぼすことはなく、梅蘭芳の日本公演に支障はなかった。

第二回訪日公演は四十二日間の滞在で、東京、宝塚、京都の三都市での開催となった。前回の公演に二十一演目を新しく加え、その中には生（男性役）、旦（女性役）、浄（隈取役）、丑（道化役）がすべて含まれ、「文戯」、「武戯」を入れ、京劇の全容を伝える演目を揃えていた。この豊富な演目数は、京劇のあらゆる種類の演目を一つの劇団が一度の訪日期間に上演する「京劇博物館」ともいえる画期的な企画であった。

前年に関東地方を襲った大震災により帝国劇場は外壁を残して焼け落ちたが、梅蘭芳の公演前に無事修復され、今回初演「麻姑献寿」のため舞台装置も改善された。第一回公演で好評であった「貴妃酔酒」では前回よりさらに磨き上げられた演技を披露し観衆を魅了する。

前回に聞かれた鳴物入りの京劇の音楽は耳障りだとの報道は消え、伴奏の情緒を理解し、楽しむ風潮が出てきた。演劇界と文芸界の評価が高く、一回目より改善された点などに注目し、その前向きな姿勢を褒めたたえている。

そして宝塚公演の映画化が決まり、撮影された作品は「梅蘭芳支那劇三種」と銘打って東京と京都の映画館で上映された。日本で撮影されたもののみならず、上海、北京で撮影された梅蘭芳の京劇映画も併せて上映された。「梅蘭芳ブーム」に乗じてレコードまで発売された。

梅蘭芳の第二回公演は次のように特徴づけることができると著者はいう。

一　京劇全体披露の一層の充実
二　梅蘭芳の得意な「古装歌舞戯」演目の増加
三　日中演劇交流と中国文化理解の深化
四　「梅蘭芳ブーム」による京劇認知度の拡大

著者はさらに日本人学者、特に日本における中国研究のメッカであった京都帝国大学の中国文学、中国哲学、中国史、中国演劇などの研究者の反響と動向を「品梅記」を中心に紹介している。

梅蘭芳の第二回公演は、日本社会に根強かった西洋崇拝から東洋文化の再認識へと進み、政治的紛争を超越したものとして捉えられたが、満州事変以後日中関係が悪化し、中国が屈辱的な立場におかれると、梅自身髭をたくわえることで自らの意思を明らかにし、「敵国」のために舞台に上がることは拒否したのであった。

第四章　訪日公演の成功要因は、外的な要因、内的な要因、美的な要因の三つから分析がなされる。

外的な要因には、まず大倉財閥の総帥大倉喜八郎をはじめとする有力な後援者の存在があげられる。第一回公演の折大倉が主催した帝国ホテルのパーティの席上、明らかにされた後援者二十五名のなかには、井上準之助、団琢磨、山下亀三郎、久原房之助、藤山雷太、安田善次郎など日本を代表する財界の大物が名を連ねており、相当な財政的援助と観客動員に大きな役割を果たしたことが知られる。

外的要因の第二は、第一次大戦の影響「大戦景気」による日本経済の活況であった。人々に娯楽や観劇を楽しむゆとりが生まれ、これも公演に多数の観客動員を可能にすることになった。娯楽と観劇の資料での検討がなされるが、一九一五年までの観劇者数は三〇〇万人ほどで推移し、劇場数も二十近くの数を維持しており、大きな変化はなかったが、第一次大戦の「特需効果」が東京の大衆の文化娯楽に影響を及ぼし、劇場の増加、観劇者数の大幅増加をもたらし、一九一八年から一九年にかけてその頂点に達した。観客者数は六〇〇万人を超えた。関東大震災によって観客者数は一時的に激減するが、一九二四年には回復し、その後増加に転じ、梅蘭芳の舞台を楽しむ土台ができたのだった。

外的要因の第三は、メディアの力である。梅蘭芳の第一回訪日時には新聞というメディアが盛んになりはじめその威力を発揮しつつあった。到着にはじまるその報道と記事は京劇に関心を持たない人々をも巻き込んで、公演の成功を支える大きな要因となった。第二回目の日本公演の折は新聞、雑誌の活字メディアに加え、レコードと無声映画が出現し、梅の活躍を音声と映像で伝えることに大きな役割を果たしたのであった。

内的な要因は梅蘭芳の芸術的造詣である。高い難度をこ

なした歌と舞踏の演技は、天女を演じた際は壮厳で優美かつ雄大であると同時に飄逸な面も併せて伝えている。それに加え、梅が作り上げた舞踊の特徴は、意味が明確、リズムとコントラストが鮮明、動と静の融合、構成の巧みさにあった。舞踏、歌唱にいずれも「構成」、「配置」、「象徴性」にこだわりを示し、華麗、簡素、動、静といった舞台表現に加えすべての動きと舞踏には歌詞と符合した象徴的な意味を持たせている。

訪日公演を成功させた第三の要因は、美学的要因であった。それは日本と中国の古典演劇の源流と美意識にあると著者は指摘する。両国は約二千年に渡り文化的交流を行ってきた。したがって古典演劇の形態と関係する美意識が大変類似している。例えば、日本の評論家がいう「支那劇と能の源流は同一」はそのいずれも中国古代の「散策」に由来する。

京劇の舞台形式は、能と比較すると①舞台の形が同じである、②舞台装置が同じである、③主役が独唱する形式が酷似している、④道化役の役割が似ている、⑤京劇の舞台道具が「能」とよく似ているというのだ。底に流れる美意識は世阿弥が能について論じた『風姿花伝』に示される「花」と「幽玄」と共通するものがあり、さらに歌舞伎の女形の芸術美と梅蘭芳の芸術は符合するものがあったのである。

終章　梅蘭芳の訪日公演とは、本書の記述のまとめである。

第一は、中国と日本における報道の差異である。中国の報道は論評記事がなく、特に第二回訪日の場合は皆無に等しかった。中国側の報道は、大きく二つに分けられる。一つは梅蘭芳の訪日の予定や訪問先、日本公演の様子のみを報じるものであり、もう一つは日本側の論評を転載する記事であった。中国における報道は当時の両国関係の影響によって純粋な報道は非常に少なく、あったとしても極めて偏見に満ち、誤った報道であったとの指摘がなされる。

第二は史実としての公演の視点である。梅蘭芳の訪日は、当時の日中両国民の文化交流に及び百年を経過した現在こそ、その歴史的意味を冷静かつ客観的に分析し、考察することができるという。

梅蘭芳訪日公演の結論を改めてまとめると以下のようになる。

この時代、中国京劇の海外公演の必然性があり、その結果中国伝統演劇の国際的価値を立証し、言語、国境、イデオロギーの壁さえ越え、それはなにより梅蘭芳の芸術的造

詣によるものであり、美意識における両国伝統演劇の共通性がその底流にあり、それが成功したのは経済的支援とメディアの後押しがあったからである。

以上が本書の内容である。

三

本書は『東瀛品梅』として、二〇一三年に北京大学から中国語で出版した研究書の日本語版である。しかし、中国語版の単なる翻訳ではなく、不生出の京劇俳優梅蘭芳の二度の訪日公演の史実と意義を中国語版の基礎の上に日本語で論じた新たな一書である。

本書の価値は、次の点にある。

第一に使用した資料がきわめて豊富で多様なことである。日本と中国における先行研究は言うに及ばず、日本公演の事情を詳細に伝える日本の新聞、全国紙のみならず芸能界の情報に詳しい「都新聞」、「萬朝報」、「やまと新聞」、公演をおこなった地域の地元紙「神戸新聞」などの記事とそこに掲載された評論家、俳優の論評を収集し、さらに京劇と能の関係については月刊『謡曲界』、帝劇の変遷に関しては『帝国劇場写真帖』、雑誌『演藝画報』『東寶』など雑誌、写真集、絵葉書、パンフレット、ポスターまでできる限りの関連資料を集めて活用した。

第二は、演劇評論家福地信世が北京で描いた梅のスケッチ、雑誌に載ったカラー写真、絵葉書、さらに梅自身が描いた「天女散花図」などカラーで紹介し、活字では表現できない梅蘭芳の衣装、装置を含む舞台姿が楽しめる。本文のなかには、帝劇の建物や内部の貴賓室、出し物のプログラム、梅蘭芳紀念館所蔵の大倉喜八郎一行とおこなった箱根遊覧の写真など洋服に帽子姿の白黒写真が挿入され、まさに「百聞は一見に如かず」の貴重な写真が本文の内容を補っている。

第三は、収集した資料をじっくり読み込み、梅蘭芳公演の意義と背景を導きだしている点である。日本語文献の引用に際し、旧漢字、旧かな使いにこだわり、当用漢字、新かな使いを避け、当時の日本のメディアの報道に迫ろうとするなどいい意味でのこだわりがみられる。

最後に著者の履歴と評者の関係に触れておきたい。著者袁英明さんは京劇の最高学府・中国戯曲学院京劇演技学部を首席で卒業、梅蘭芳の子息梅葆玖の直弟子であり、梅派芸術の後継者のひとりである。日本公演を機会に日本への留学を志し、明治大学で経営学を学んだあと早稲田大学大

学院アジア太平洋研究科で国際学修士号を取得した。非常勤講師として早稲田の同研究科で「日中関係論」を担当した評者の受講生のひとりが袁さんであった。教室でひときわ目立つ存在の袁さんが京劇の女優であることを知り、修士論文のテーマに「日中演劇交流史」を取り上げるについて相談に乗ったこともあった。

その後、袁さんは慶應はじめ日本の各大学で中国語を教えたり、宝塚歌劇団やハワイ大学で所作・演技の指導をするなど多方面で活躍し、桜美林大学芸術文化学群に迎えられ、現在教授の地位にある。縁あって桜美林学園の理事長・学園長であり桜美林大学の総長でもあった佐藤東洋士氏と結ばれ、結婚したが、佐藤総長は二〇二〇年一〇月に急逝、本書は夫であった佐藤総長と梅蘭芳訪日公演一〇〇年に捧げるものとなった。

本書は、梅蘭芳の二度の訪日を対象とする力作であると同時に日中文化交流史研究の一例としても大きな価値がある。政治が大きく関わってくる一九五六年の三度目の訪日についての研究が待たれる。

（桜美林大学出版会、二〇二一年、四〇四ページ）

池井　優